

# 地域における寺院の社会的責任

## 一月刊『地域寺院』を資料として一

小川 有閑

大正大学 地域構想研究所 研究員

(要旨) 本論の目的は、大正大学地域構想研究所・BSR推進センターが編集する月刊『地域寺院』を題材に、現代における伝統仏教(僧侶・寺院)が果たす役割を示すことにある。『地域寺院』は、伝統仏教(僧侶・寺院)の社会貢献活動だけでなく、伝統的な活動の再評価を念頭に置き、これからの寺院の在り方を考えるために、実際の事例を紹介している。本論では、これまで『地域寺院』で紹介された33の事例を、「事業型」、「日常型」、「定例型」、「イベント型」に分類し、さらに、その4類型を「課題解決型」、「課題発見型」、「縁結び型」、「寺他協働型」と読み替えられることを示した。また、33の事例から伝統仏教が地域と関わる際のポイントを抽出した結果、「まちを愛する」、「まちに出る」、「まちの人とともに」となった。

**キーワード:** BSR (仏教者の社会的責任)、伝統仏教、社会貢献、地域貢献

### 1. はじめに

本論では、大正大学地域構想研究所・BSR推進センターが編集を行う月刊誌『地域寺院』を資料として、地域のなかの社会資源としての寺院の役割について考察をする。

まず、『地域寺院』の趣旨を理解するため、編集機関であるBSR推進センターについて説明したい。「BSR」とは、Buddhist Social Responsibility (仏教者の社会的責任)の略称である。近年、特に東日本大震災を契機として、宗教者の社会貢献が論じられるようになり、宗教者が様々な形態で社会貢献活動を行っている。とくに、災害支援や貧困対策など、社会問題の解決への取り組みがクローズアップされ、評価されている。<sup>1</sup>

他方、「社会的責任」は、ステークホルダーとの関係性で生じる責任をいい、たとえば、檀信徒と僧侶の関係においては、葬儀・法事を執り行うことも社会的責任を果たすことであり、地域と寺

院の関係においては、境内をラジオ体操の会場に提供することも該当する。社会貢献が評価される風潮のなか、これまで伝統的に行われてきた寺院の活動は等閑視される傾向があるが、BSR概念によって、現代の社会問題に対処する社会貢献活動から、伝統的活動まで広く仏教者の活動の再評価が可能となる。

BSR推進センターでは、BSR概念のもと、日本各地に存在する仏教寺院を、文化、教育、福祉における地域資源とみなし、地域社会に寄与する寺院の社会参加の在り方を収集、分析をすることで、寺院の潜在的役割の可視化を目指している。『地域寺院』の編集、社会への発信は、その一環である。

### 2. 『地域寺院』

『地域寺院』は、2016年6月に創刊され、2019年2月時点で33号まで刊行されている。発刊当初は、大正大学地域構想研究所編『地域人』の付録という位置づけであったが、2017年3月に「地域寺院倶楽部」が創設され、第10号(2017年3月号)から、地域寺院倶楽部の会報として刊行されている。

創刊号には、発刊の趣旨が次のように記されて

<sup>1</sup> 稲場圭信・櫻井義秀編『社会貢献する宗教』(世界思想社、2009)、磯村健太郎『ルポ 仏教、貧困・自殺に挑む』(岩波書店、2011)、北川順也『お寺が救う無縁社会』(幻冬舎、2011)、臨床仏教研究所編『社会貢献する仏教者たち』(白馬社、2012)、臨床仏教研究所編『「臨床仏教」入門』(白馬社、2013)など。

いる。

いま、日本社会は大きな変革期を迎えています。戦後の経済成長にストップがかかり、人口も減少しはじめました。高齢化、少子化、地方の過疎化、貧富の格差、家庭の崩壊、自然災害、そして人心の荒廃等々さまざまな現象が目に見えて起こっています。これは戦後の復興にあたって、それまでの日本文化を脇において、経済一辺倒の価値観で進んできた日本社会の結果ともいえます。

こうした社会状況のなか、宗教界にも大きな変化が起こっています。信仰心の希薄化、宗教への無関心はもとより、直葬などにみる葬儀の簡略化や年忌などの簡素化、墓終い、そして寺離れ。寺院の運営は、特に地方において危機に瀕しています。

しかし、こうした現象は、はたして社会の変化だけが原因なのでしょうか。私たち宗教者に反省すべきことはなかったのでしょうか。この殺伐とした社会のなかで、仏教文化に関心を持ち、その教えと救いを求めている人は多くいます。私たちはそれに応えてきたのでしょうか。寺院は、“社会の資源”ともいわれます。いま、この資源を地域社会のために活かし、なにか行動を起こさなかったら、それこそ近い将来、多くの寺院は“消滅”する可能性が高いでしょう。

この『地域寺院』は、これからの地域社会に必要とされる寺院の在り方を探っていきます。

発刊の大きな動機の一つには、趣旨の後半に述べられている寺院消滅への危機感がある。すでに以前より、各教団内では、過疎地寺院の経営難や後継者不足は議論されていたが、2014年、増田寛也が『地方消滅 東京一極集中が招く人口急減』を著し、このままでは896の自治体が消滅する可能性がある」と指摘。消滅可能とされる自治体に多くの寺院が存在することから、仏教界では寺院消滅への懸念が深まることとなった。さらに、2015年

には、自らも僧籍を持つ鶴飼秀徳が過疎地での寺院の窮状を描いた『寺院消滅』を出版。現実に寺院が消滅していることをルポした本書は大きな反響を呼んだ。

この、ある意味では手の打ちようがない人口流動の現実のなかで、どこに寺院の役割や存在価値があるのか、その在り方を探るというミッションが『地域寺院』に課せられたのだった。

もう一点、『地域寺院』の目的は、BSR推進センターの説明にあるように、これまで伝統的に行われてきた寺院の活動への再評価である。その背景には、前述のように、社会貢献活動が取り沙汰される一方で、仏事や地域との交流などの伝統的活動が当たり前のこととして捨象されてしまいかねないことへの危惧が挙げられるが、その他に、次のような仏教界の現状がある。

2000年以降、仏教界には若手僧侶による超宗派の活動が目立つようになってきた。その一つは貧困問題や自死問題、終末期ケアへの取り組みなどのいわゆる社会貢献活動であり、「実践系」の流れと言えるものであるが、もう一つの流れは、「発信系」とカテゴライズできる動向である。インターネット上の寺院であったり、フリーペーパーの発行、寺院を会場とした大規模なフェスの開催、テレビ番組への出演であったりと、新たな形で社会に発信する若手僧侶が続々と出現しているのだ。<sup>2</sup>発信系の動向は、仏教に関心を持つようになる人が増え、仏教界の活性化につながり、もちろん歓迎すべきことではあるのだが、発信力を持つ僧侶や、ある意味では派手な活動が注目を集めることにつながり、やはり伝統的に継承されてきた活動が捨象される可能性がある。発信力を持つ僧侶の活動は、発信力を持たない僧侶にとっては、我が事とはならず、「あれは特別な人がやれることで、うちでは無理」という他人事のままとってしまいかねない。

積極的に発信していなくても、メディアが取り上げていなくても、日が当たらない中、地域の人や檀信徒を対象に継続的に努力を積み重ねてきた

<sup>2</sup> 拙稿「僧侶による“脱、社会活動——自死対策の現場から」、『いま宗教に向きあう2 隠される宗教、顕れる宗教』pp126-142、岩波書店、2018

寺院・僧侶の活動事例は、日本中に無数にあるはずだ。そのような事例を取り上げ、現代社会における価値を再確認、再評価する。さらに、これから何かを始めたいと考えている僧侶が「これならうちでもできるかもしれない」と思えるようなエンパワー機能を持つことが『地域寺院』には期待されたのだった。

### 3. 寺院の活動の類型

『地域寺院』の誌面構成は、一つの寺院の活動を紹介する巻頭特集「まちに開く、まちを拓く」、若手僧侶へのインタビュー「尋坊帖」、ほかにコラムと投稿ページから成る。前項で述べた『地域寺院』の趣旨を最も反映するものが、巻頭特集であろう。「まちに開く、まちを拓く」というタイトルには、寺院の扉を開かず、地域につながる姿勢、寺院が中心となって地域づくりを行う姿勢を持つ寺院を紹介する意図が込められている。その巻頭特集を一覧にしたものが、表1である。33ヶ寺の活動は種々様々だが、その形態によって「イベント型」、「定例型」、「日常型」、「事業型」に4分類を施してみた。<sup>3</sup>なお、複数のタイプに重なる活動もあるが、比重の大きい方に分類している。以下に各タイプ、3ヶ寺ずつ触れてみたい。

#### (1) イベント型

一年に1回、一ヵ月に1回といった間隔で寺院を会場にイベントを開催し、そのイベントを僧侶だけで運営するのではなく、地域の人々とともに作り上げていくタイプを「イベント型」とした。主に縁日という伝統的活動の一種ではあるものの、作り上げていく過程の工夫で新たな機能を果たしていることが分かる。

第3号の光源寺では、毎年7月9日・10日、観音様の縁日に「ほおずき千成り市」を開催。2日間の来場者はおよそ3,000人にのぼる。この縁日の特徴は、屋台のプロがないことだ。出店者は主婦や会社員、学生などの市民であり、地

域にゆかりのある人で構成される。縁日を通じて知り合った人たちの交流が、町を住みよいものになっているという。

第14号の海禅寺では、2012年から5月の第3日曜日に「聖天祭」を開催しているが、海禅寺も手作りの縁日を心がけている。記事には「いろいろな人たちが関わり合うことで、つながりが生まれ、それがまた新しいご縁を生み、祭りを支える」と、イベントをきっかけとした人のつながりの波及を紹介している。

人口減少が進む地域での寺院の在り方としてユニークなのは、第11号の醫王寺五大院だ。過疎化が進む福島市飯野町の五大院は、住職不在の無住寺院で、放置された結果、荒れ寺となっていた。町民から縁日の企画が立ち上がり、檀家ではない有志たちが掃除と修繕を繰り返し、寄付を募って寺を再生させたのだ。そして、毎月28日に不動尊の縁日を開催するに至った。現在は、町民によって「縁日を開く会」が結成され、主体的に運営されている。五大院の兼務住職を務める鈴木行賢氏は「お寺は地域の中心にある。寺のほうから無理に動くのではなく、地域に仲間をつくって、その才能を持ち寄ってもらう場となる。そんな姿勢が大切ではないかと思います」と語っている。僧侶が先頭に立たなくても、イベントを契機として寺院という場所をまちに開くことで、住民が集い、動き、結果的にまちが拓かれるという好例であろう。

#### (2) 定例型

月に1回、週に1回など定期的に行事を行い、人が集い、交わるという積み重ねから寺院や町が盛り上がっていくタイプを「定例型」とした。イベント型がお祭りのような行事とすれば、定例型はより小規模、小コストで行われる行事といえよう。寺院は文化行事を行ってきた拠点でもあったことを考えると、セミナーや読書会などは決して新奇な取り組みとは言えない。

第18号の一心寺は、ほぼ月に1回のペースで「てらこやあ!」を開催。セミプロ落語会から心理学セミナー、児童虐待など硬軟おりませ、大人向けの企画を立て、一方で、子ども向けには「み

<sup>3</sup> 分類にあたっては、大正大学地域構想研究所 BSR 推進センター助教・高瀬顕功氏に多大な貢献をいただいた。

んなのつどい」を数か月に1回のペースで開き、紙芝居や人形劇などで楽しませている。住職の前田健雄氏は、真宗大谷派のハワイ別院に駐在した経験から、寺院をオープンにして、「とにかく地域の人に知ってもらい、来てもらわなければならない」と学んだという。

第32号の寶樹寺では、毎週水曜日に「五位堂子ども文庫」を開き、放課後の子どもたちが思い思いに過ごす時間と場所を提供している。「子ども文庫」は30年続けており、自分も幼少時に通っていた女性が、幼児を連れて参加しにくる様が記事に紹介されている。継続することの重要性があらためて認識できる事例である。

第26号の獨園寺は、外国人の住人が多い横須賀で、英語での座禅会を開催している。英語のみではなく、日本語でも指導するので、外国人だけでなく、近隣住民も参加。出会うはずのなかった人たちが国籍や宗教を超えて、寺院で出会い、交流するコミュニティが生まれているという。

### (3) 日常型

特別なイベントを行わなくても、日常のなかで地域との交流を心がけているタイプを「日常型」と分類した。僧侶も地域社会の住民であり、その中で自然な形で住民同士の触れ合いを持っているものが、ここにあてはまるのだろう。

第7号の光明寺の住職夫人（坊守）の鶴園恭子氏は、家を出たら2時間は帰ってこないという。なぜなら、「一人暮らしの高齢者や病気がちでひきこもり気味の人、家族を亡くしたばかりの人など、定期的に顔を出している家が15、6軒、そのほかにも気にかけている家はもっとある。自転車での買い物の帰り道、ちょっと寄ってみる。2、3軒のはしごは日常茶飯事、独居のお宅であえれば、1時間以上話し込んでしまう」からだ。光明寺のある宮崎県高原町も少子高齢化が進む町だが、鶴園氏はこの町で生まれ育った人が、年をとっても、この町に居続けられるよう、見守り役になるのが寺院・僧侶の務めだと語っている。

第10号の秀林寺の住職・遠田旭有氏は、人口4,300人という過疎の村を良くしようと、村のあらゆる行事に顔を出している。「僕が行けば、

参加者が一人増えるわけです。10人が11人になる。人が増えた方が楽しいじゃないですか」と、みんなが住みやすい村にすべく奮闘している。

第31号の流山開教所源正寺は1999年の創建。数百年の歴史を持つ寺院がほとんどの日本では、珍しい開教寺院である。現在の場所には2002年に開設。一目では寺院と分らないような一軒家だが、檀信徒は増えているという。自ら積極的に寺院の外に出かけ、地域のグループホーム4か所を毎月訪問して、読経・法話を行ったり、檀信徒同士の交流を深めるために旅行会を開いたり、人と人のつながりをどう強めていけばよいか、工夫を凝らしている。

### (4) 事業型

寺院を拠点として、NPOや社会福祉法人などを設立し、地域課題に取り組む活動をしている事例を「事業型」とした。戦前までは、社会福祉を宗教者・宗教団体が担っていた例は数多くあり、親和性が高い領域ともいえる。

第2号の源清寺は、引き取り手のいない、身寄りのない遺体を引き取り、葬儀を執り行うNPO法人を2001年に立ち上げる。葬儀件数は年々増え、事業は拡大。現在は、成年後見、身元保証なども引き受けている。寺は福祉活動をするのが当たり前という考えのもと、行政や地元施設とも連携をとっている。

第16号の光澤寺は人口約1万7千人の町にあり、過疎化に直面している。墓地もなく、檀信徒の高齢化、後継者不足に悩む住職・宗元英敏氏は、「地元だけに顔を向けていては近い将来、寺は間違いなく維持できなくなる。長く支えてきてくれた門信徒のために、寺が自らの力で生き残り、逆に地域を支えられないか」という発想から、2012年に宿坊をオープン。現在は、周辺の空き家を利用し、旅行者の長期滞在による地域の活性化を目指しているという。

「目の前の困っている人を助けたい」という一念だけで、ブルドーザーのように働くのは、第17号の慶蔵院だ。中国人の中学生の教育サポートのために、NPOでらこや塾をスタートした住職・前島格也さんは、長年、国籍を問わず地域の子ども

たちの学習支援を行ってきた。そして、その塾の運営費を作り出すために、ニンニクの栽培をしている。その仕組みは、地域住民に寄付を依頼し、応分のニンニクを配るというシステムだ。クラウドファンディングを先取りしているようなシステムである。また、最近では、後継者がおらず困っていた檀信徒からガラスハウスを引き取り、株式会社を設立して、ガラスハウス農業にも邁進している。

以上、4種の類型に分けて、事例を見てきたが、4類型を内容において、以下のように再定義ができるのではないだろうか。「イベント型」は寺院の内と外の人たちが共に力を合わせて催しを行うという地域の力を集約させる「地域力集約・協働型」、「定例型」は寺院の催しを通して、それまで交流の無かった地域住民がつながるという「縁結び型」、「日常型」は日常生活の交流の中で地域住民の課題を発見していく「課題発見型」、「事業型」はある地域課題を解決するために何らかの組織化された行動を起こすという点で「課題解決型」と再定義してみたい。

#### 4. 寺院・僧侶と地域との関わり方

前項では活動の類型を示してみたが、本項では、各活動に共通する地域との関わり方のポイントを抽出してみたい。

##### (1) まちを愛する

寺院に住む僧侶とその家族は当たり前だが、その地域の住民でもある。自分が住む地域を好きかどうかということは、重要なポイントになり、ひいては地域のためにどれだけ尽力できるかに大きく影響してくる。

うちのように専業でやれるお寺の僧侶は、時間の融通が利く。そうであれば地域のため、社会のために時間を費やすのは当然のこと（創刊号）

この町でがんばって生きてきたおじいちゃん、おばあちゃんにこの町で亡くなってほしいんです。知らない土地の施設に行って、最

期を迎えてほしくない。障がいのある子どもがいたら、地域で育てないといけない。入所施設で育ててしまったら、ここに戻ってきても、知らない子になってしまう。お節介かもしれないけど、そのための地域の見守り役として、お寺は存在したい（第7号）

村を盛り上げることは、檀家さんの住むまちが良くなるということ。檀家さんも住みやすくなるだろう、プラスになるだろうと思っています。村のために働くことと、檀家寺の住職をつとめることはつながっている（第10号）

この町の子どもたちが大人になった時、「面白いことをやるお寺があったな」とどこか心の片隅に覚えておいてくれたら、違う町に移ったとしても、近くのお寺に寄ってくれるのではないかな。（第18号）

##### (2) まちに出る

寺院の活動が地域に浸透していくためにも、僧侶が寺院にこもってばかりではなく、地域に出ていくことが肝要である。見守りという観点からいっても、一般人が寺に足を運ぶということは非日常行為であり、生活は見えにくくなる。寺院から出て、自宅においてでなければ見えない状況というものもあるのだろう。

自分から地域に入り込まないとキーマンに出会う可能性は低い。お寺で待っているは駄目、衣を脱いで入っていくことが大切だと思います。（創刊号）

お仏壇は家の奥にありますから、家庭の奥まで見ることはできるんです。家の中を見れば、その家のいろいろなことが見えてくるでしょ。民生委員や保健師だって、普通は玄関までですよ。（中略）お寺ではかしこまってしまいうから、プライベートなことはなかなか話してもらえない。でも、自分の家でだったら話してくれる。まさにホームなんですよ。（第

7号)

お坊さんかどうか分からなくてもよい、いつも、あの人はいるなと思ってもらえれば、それは、村の人の「日常の中」に存在する人になれたということ。寺の中にはいないけれども、いつも人のそばにいる。(第10号)

人とつながると、そこから次が開けて見えてくるという感覚。やりたいことも、やってくれる人も、つながりの中から出てくる。(第14号)

(僧侶は) 特別な存在、頭を下げなければいけない存在ではない、日常にいるフランクな存在であることが大事だった。僧侶も寺院も地域の日常に溶け込んだフランクな存在であるべき。(第18号)

### (3) まちの人とともに

地域の人とつながることができたら、その人たちと手を携えることが大事。寺院を拠点に何かをやろうとしても、担い手が僧侶とその家族だけでは、継続が困難になる。また、僧侶だからと上から目線になることなく、地域を良くしたいという同じ思いを持った対等な者同士で、ともに考え、ともに汗をかくことは、おのずと地域のつながりを強くするだろう。

メンバーの多くは、定年退職の前後、まだまだエネルギーがあり、地域に関心を持ち出す世代。「お寺を盛り上げることならやってみよう」とすすんで協力を申し出てくれた。(創刊号)

とにかくアッ(この人!)と思った人の電話番号はすぐ聞くようにしています。それで、この日からこの日までイベントがあるんだけど、無理しなくていいから来てって電話しちゃう(第7号)

10月のニンニクの植え付けや6月の収穫は

「てらこや塾」の子どもたち、保護者、職員、来てくれたオーナーなど地域の人の手で行う。延べ250人ほどになるという(第17号)

みんなで作り上げる会であれば、感動を覚えてもらえる要素は増えてくるはず。そのために、ご縁のある人たちをうまく巻き込み、引き立たせるプロデューサー役が必要となる。それこそが住職の役割(第18号)

僧侶が主導すると、つい寺目線でのイベントとなってしまう。門徒であろうとなかろうと、市民目線の「お寺でこういうことをやってみたい」という発想が、別院へのハードルを下げて、来やすい場所にしていけるのだろう。(第21号)

## 5. おわりに

『地域寺院』を資料として、地域の社会資源としての寺院の在り方を考察してきた。寺院という空間や僧侶が持つ人的ネットワーク、それ自体が社会資源ともいえるが、現代社会・地域社会のニーズに応じた伝統的活動を類型化することで、より一層、社会資源としての伝統仏教(僧侶・寺院)の機能が見えてきた。

また、記事から抽出した地域との関わり方としては、「まちを愛する」、「まちに出る」、「まちの人とともに」が挙げられた。当然といえば当然の要素であるが、『地域寺院』の記事が、これからの寺院の在り方を考える上での、貴重なデータの集積体となる可能性を示すことができた。

しかし、類型化をより精緻なものとして、現代仏教研究に寄与するものとしつつ、現実の活動のヒントになるようなものとしていくことが求められるであろうし、地域との関わり方のポイントもより普遍化していかなければならない。そのためにも、『地域寺院』が研究資料として耐えうるものになるよう、一層の努力が必要となることを肝に銘じて筆をおくこととする。

表1 地域寺院巻頭一覧

号	年	月	県	市	宗派	寺院	内容	類型
1	2016	6	群馬県	高崎市	真言宗豊山派	蓮花院	写経絵、詠唱、餅つき、音楽会などで地域に開放。	日常型
2	2016	7	群馬県	館林市	曹洞宗	源清寺	NPOの葬儀社を立ち上げ、身寄りのない人の葬儀を執行。	事業型
3	2016	8	東京都	文京区	浄土宗	光源寺	少子高齢化が進む地域で、地域有志による観音様の縁日の再興。	イベント型
4	2016	9	千葉県	勝浦市	日蓮宗	妙海寺	地域住民のやりたいことを手伝う形で、地域活性化事業を展開。	日常型
5	2016	10	和歌山県	かつらぎ町	救世観音宗	童楽寺	ファミリーホームを運営し、里親として児童の社会的養護に携わる。	事業型
6	2016	11	岩手県	二戸市	浄土宗	願海庵	地域交流の場として「願海庵まつり」を立ち上げる。	イベント型
7	2016	12	宮崎県	高原町	浄土真宗本願寺派	光明寺	保育園を運営しながら、気になる門徒の家をまわりアウトリーチ活動	日常型
8	2017	1	京都府	京都市	真宗大谷派	東光寺	2002年、子ども会を結成。学童保育のような活動から、子育て支援まで展開	日常型
9	2017	2	群馬県	富岡市	天台宗	金剛院	朝活（月1回の読書会）を開催。	定例型
10	2017	3	山形県	鮭川村	曹洞宗	秀林寺	村の諸役に参加し、地域の活性化に一役買う。自死遺族の支援も行う。	日常型
11	2017	4	福島県	福島市	天台宗	五大院	地域おこしとしての不動明王の縁日を再興。	イベント型
12	2017	5	奈良県	奈良市	真言宗醍醐派	十輪院	毎朝の勤行の開放、カレーの会のほか、市内や東京でも悩み相談を実施。	事業型
13	2017	6	兵庫県	篠山市	曹洞宗	長楽寺	月1回、長楽寺文化教室を開催。坐禅や写経、ヨガの後に食事を提供。	定例型
14	2017	7	長野県	上田市	真言宗智山派	海禅寺	大聖歓喜天のお堂の修繕とともに、「聖天祭」を立ち上げる。	イベント型
15	2017	8	石川県	金沢市	真宗大谷派	乗圓寺	中高年の人材紹介事業と就職のための技能習得（介護・パソコンなど）教室を運営。	事業型
16	2017	9	鳥取県	八頭町	浄土真宗本願寺派	光澤寺	過疎化が進む地域で、宿坊の経営を通じ寺院の経済的な自立を目指す。	事業型
17	2017	10	三重県	伊勢市	浄土宗	慶蔵院	外国人向けの日本語学習支援、農業事業に通じた障害者の雇用先（居場所づくり）	事業型

号	年	月	県	市	宗派	寺院	内容	類型
18	2017	11	愛知県	名古屋市	真宗大谷派	一心寺	休眠していた文化教室を再開。落語会から児童虐待、死を考える集いなど大人向け。	定例型
19	2017	12	和歌山県	日高町	浄土宗	日高組	地域57ヵ寺が徳本上人を顕彰する法要を企画。役場とも協働し町おこしイベントを運営。	イベント型
20	2018	1	大分県	大分市	日蓮宗	妙瑞寺	終活セミナーの企画運営を通じて、NPO法人を立ち上げ、永代供養墓を運営。	事業型
21	2018	2	北海道	根室市	真宗大谷派	根室別院	真宗教化センターの企画のモデル寺院として、コミュニティカフェの運営やそば打ち大会を実施。	定例型
22	2018	3	佐賀県	多久市	浄土宗	専称寺	障害者の就労支援、生活介護のための社会福祉法人を運営。	事業型
23	2018	4	岩手県	大槌町	曹洞宗	吉祥寺	3.11後、避難所として寺院を開放。犠牲者の供養と伝承を通じ震災復興に努める。	日常型
24	2018	5	静岡県	掛川市	真宗大谷派	蓮福寺	外でストリートカフェ、家で法話カフェを実施。	定例型
25	2018	6	熊本県	熊本市	浄土真宗本願寺派系単立	香福寺	月2回、落語会を開催。一般社団法人を立ち上げ、グリーンケアサロンも実施。	定例型
26	2018	7	神奈川県	横須賀市	臨済宗建長寺派	独園寺	外国人が多い町・横須賀で坐禅会を英語で開催。自死問題、悩み相談にも取り組む。	定例型
27	2018	8	新潟県	新潟市	真宗大谷派	金寶寺	英会話教室（月3回）、無料学習支援（月2回）、子ども食堂（月2回）の運営	定例型
28	2018	9	大阪府	豊中市	浄土真宗本願寺派	法雲寺	お寺ライブ、英会話教室、写経会などを開き、境内にはバスケットコートがある。	定例型
29	2018	10	石川県	金沢市	浄土宗	如来寺	8月上旬、本堂を開放し昼寝場所を提供。毎年、7月～10月まで石仏彫りを開催。	定例型
30	2018	11	北海道	函館市	浄土宗	湯川寺	地元神社と共同でフェスを開き、カレーをふるまう（カレー寺）。	イベント型
31	2018	12	千葉県	流山市	真宗大谷派	源正寺	三重の寺に生まれるも、僧侶の在り方に疑問を抱き、都市開教する。	日常型
32	2019	1	奈良県	香芝市	浄土宗	寶樹寺	週一回「子ども文庫」を開催し、子どもの居場所づくりを行う。	定例型
33	2019	2	愛知県	名古屋市	浄土真宗本願寺派	教西寺	寺子屋や月に一回のイベントを開催。住職と坊守が二人三脚で、グリーンサポートに取り組む。	定例型